
事務所 〒421-12 静岡県牧ヶ谷2078 静岡工業技術センター 会長 鈴木 仁
(E) 静岡県産業技術協会内(Tel 054-278-3611) 編集責任者 本領泰弘
振込口座 清水銀行須津支店 普通預金 2076880 静岡県技術士協会 木村芳正

第3回例会 浜松アクトシティ見学会

本年度第3回例会は、西部地区主催行事として、2月4日浜松で開催され、建設中の浜松アクトシティの見学を主行事とし、続いて定例の懇親会が行われた。此の度の例会の開催に当っては、特に乾副会長及び望月主祐会員に格別のご尽力をいただいた。

浜松アクトシティは、人口56万を擁する浜松市が、東京と大阪の間地点に位置する利点を生かして更なる発展を目指すために実現を

図っている諸構想の一環として、浜松駅北側で進めている都市開発事業である。これは、浜松テクノポリス計画・国際コンベンションシティ構想・音楽文化都市構想など21世紀へ向けての新たな都市構想の中で、都心部での推進拠点として位置づけられており、1994年10月完成予定となっているものである。

予定としては、建設現場を直接見学することが計画されていたが、たまたま内装工事等





の最中で、内部への立入りは危険なことから、やむなく外から工事の一部を見ることとなった。

最初にフォルティビル7階の説明会場で、浜松市アクトシティ部の北川課長・小林係長及び設計担当の日本設計㈱の米川主管から種々の説明を受け、活発な質疑応答が行われた。

アクトシティの「アクト」は、アート、コンベンション、テクノロジーの各頭文字をとって名付けられたもので、浜松市が楽器や自動車の製造産業都市から国際的音楽都市へ、コンベンションによる文化・産業・技術の交流拠点へと躍進を目指していることを表わしている。

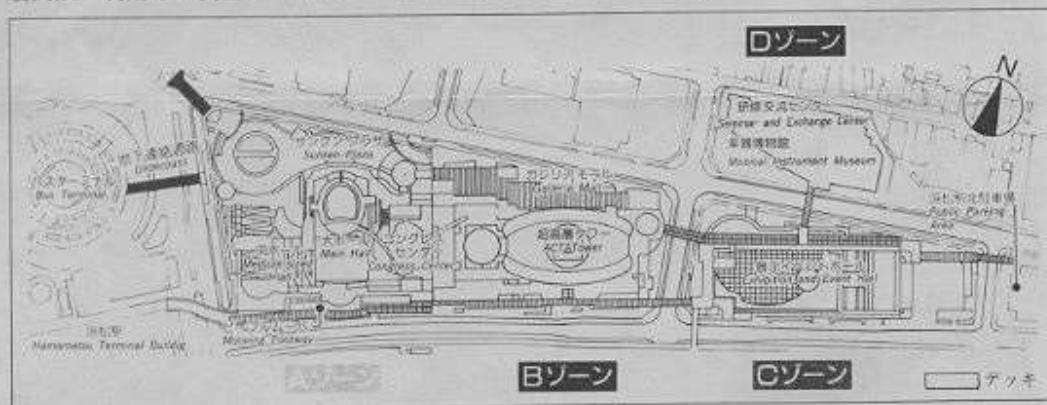
この構想の具体化は、JR東海道本線の高架化と線路の移動、貨物ヤードの移転等によって生み出された空間と、浜松市が民間活力を最大限に利用した資金によって実現したもの

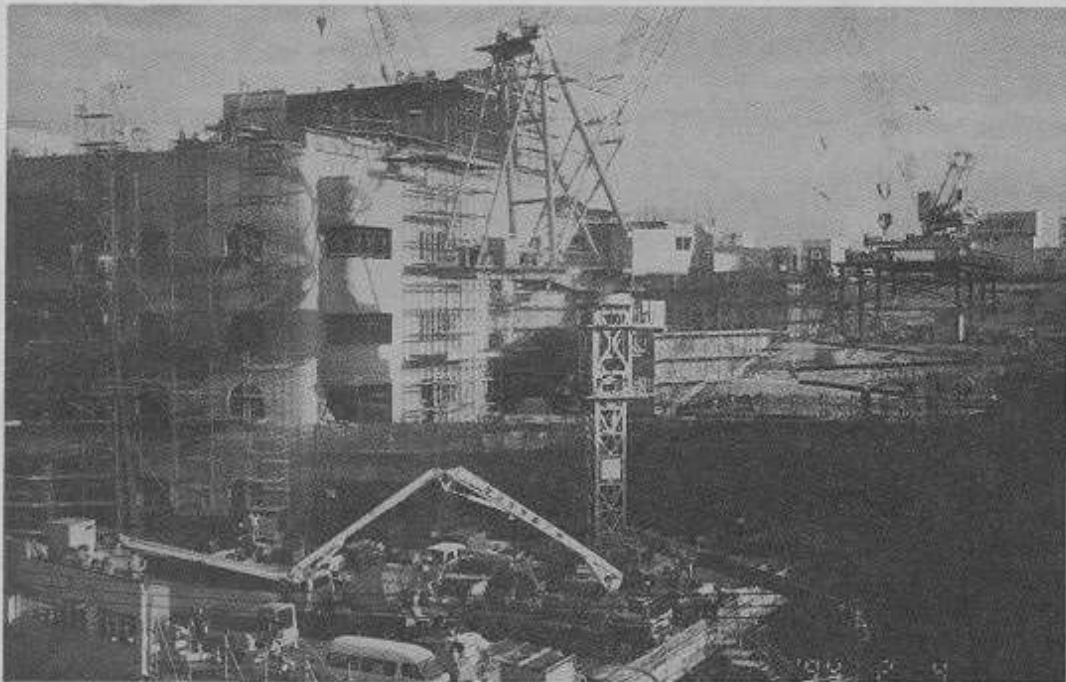
である。

アクトシティはA～Dの4ゾーンに大別され、中心的存在としてBゾーンのアクトタワーがある。

Aゾーンは浜松市の施設であって、大ホール・中ホール・各種会議室を有するコングレスセンターとなっている。大ホールは、本格的なものとしては日本初とされる四面舞台を持つ多機能ホールで、収容人員は2300人以上、6ヶ国語同時通訳可能となっている。

Bゾーンは民間施設（第一生命）で、オフィス・ホテル・商業ゾーンとなっている。主体となるアクトタワーは、地下3階、地上45階、塔屋4階、最高高さ 212.7mの楕円形断面の建物であって、アクトシティ全体のシンボリック存在である。その27階までは店舗・事務所・宴会場等が占め、それ以上は主としてホテルとなっている。





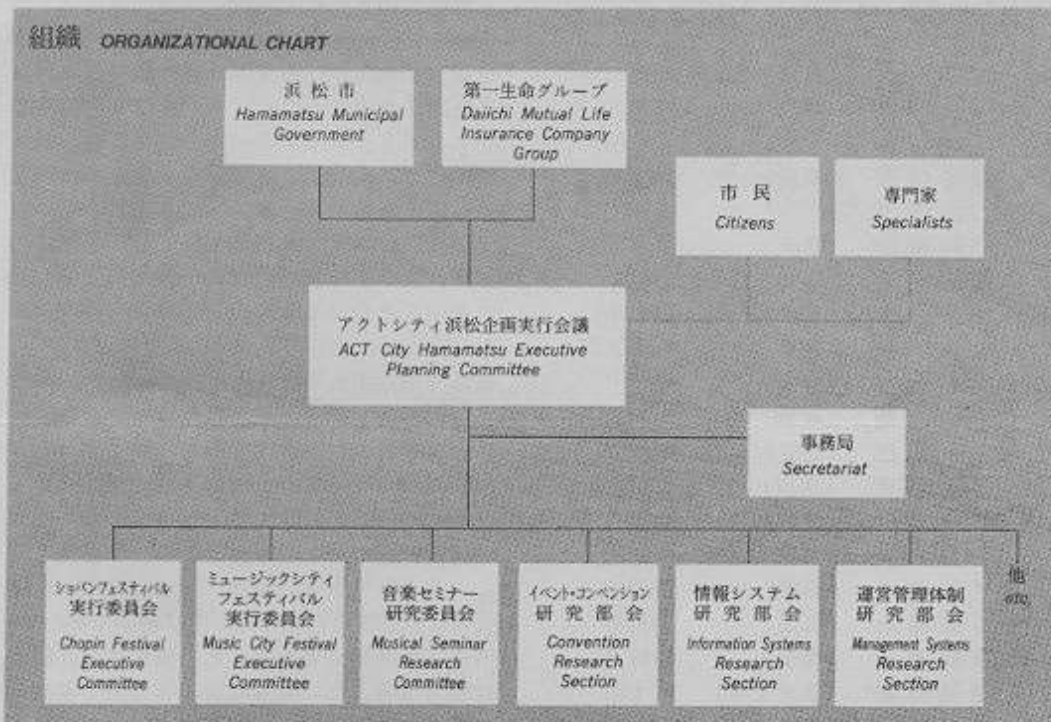
C及びDゾーンは市の施設で、Cゾーンは展示イベントホール、Dゾーンは楽器博物館及び研修交流センターとなっている。

各ゾーン間及び浜松駅・駐車場等との間は、地下及び地上の通路・ブリッジ・可動歩廊などで結ばれ、アクトタワー塔屋上はヘリポートとなっていて、アクトシティ全体と周辺施設が一体となって機能するように計画されて

いる。

建物基礎は、地表より約41～43mに分布する洪積れき質土層に、杭径 1.5～2.4mの場所打ち鉄筋コンクリート拡底杭（先端をベル状に拡げた杭、ここでの最大拡底径 3.6m）を施工している。地下3～4階の施工で、実際の杭長は17～29mとなる。

地下工事のための土留め壁は、芯材にH形



鋼または鋼管を挿入したソイルセメント柱列壁（厚さ 0.8m）を用い、掘削深さの大きい部分（21～25m）に対して、壁深さ36mまで根入れしている。これは、天竜川を近くに控えた豊富な地下水に対する施工の安全を考慮した方法である。

土留め壁を支える工法は、上3段を除去式グラウンドアンカーで引き留め、下2段を切梁で対面土留め壁を反力としている。

隣接する鉄道交通の振動は、南面の土留め壁と本地下壁体の間に防振材を挟んで、各建物への伝達を遮断している。

施工に使用したセルフクライミングクレーン（高層躯体の立上りに合せて自身で登って行く機能を持つクレーン）の撤去は、5段階で行うとのことであった。

アクトタワーの固有振動周期は 4.5～4.8 秒、振幅は最大 2 m と計算されている。

地域の下水は、市の下水道へ流され終末処理場へ送られる。トイレ用水は工業用水を使用し、雨水の一部は回収して貯水槽(600ton)

に貯め、これを屋上樹木（中ホール屋上、イベントホール屋上等は屋上公園）の灌水にあてることになっている。また浸透マス、多孔管などを埋設して、雨水をできるだけ地下へ還流させるなど、水資源に対する配慮も含まれている。

ゴミは、一般地域と同様に、分別収集して市で処理（事業所のゴミは有料）する。尚、ホテルの生ゴミは冷凍して搬出される。

浜松市と第一生命グループは、施設完成後の運営管理に向けて、ハード、ソフト両面から連携をとっていくため、アクトシティ浜松企画実行会議を設立し、運営管理体制の研究、各種の企画、誘致活動、広報活動などにとりかかっている。

現在の見通しでは、各施設の利用率は当分の間 100%近く、その後もかなりの水準で推移するとされているが、恒久的にアクトシティの機能を最大限に発揮させるべく、関係者は一層の努力を続けたいとのことである。

1993年度 技術士・技術士補試験 静岡県関係合格者

1993年度技術士及び技術士補試験の結果が先頃発表されたが、そのうち県内合格者は次の通りである。（敬称略順不同、住所の間合せは会報編集担当まで）

技術士補

山口 貞夫	（電気・電子）	島田市
河村 和典	（建設）	静岡市
河合 良	（建設）	浜松市
牛尾 伸吾	（水道）	島田市

技術士

仁科 稜三	（機械）	清水市
渡辺 量夫	（電気・電子）	沼津市
谷倉 泉	（建設）	富士市
角入 一典	（建設）	富士宮市
鈴木 一善	（建設）	静岡市
小久保 優	（建設）	静岡市
片山 正巳	（建設）	藤枝市
小野田 富夫	（建設）	沼津市
黒田 賀久	（建設）	静岡市
石川 正人	（農業）	藤枝市
平尾 素一	（農業）	静岡市
石井 崎夫	（農業）	菊川市
海野 泰一	（農業）	静岡市
稲田 泰樹	（経営工学）	富士市
荒明 正春	（応用理学）	御殿場市

石野 功	（建設）	清水市
古川 克三	（建設）	森町

舞阪町クリーンセンター技術監査

舞阪町の委託による同町建設工事に係る技術監査は、例年渡辺佐一郎会員が担当し実績を重ねて来たが、今年度は舞阪港付近に新たに建設されることになったゴミ焼却炉を中心とするクリーンセンターについて監査の委託を受けた。今回は、焼却炉及び周辺機械設備が主体となるため、機械部門の本領泰弘会員が担当し、昨年10月15日及び今年1月12日の2回に亘り現地調査を行って調査報告書を作成提出、2月10日報告会に出席して詳細説明を行った。なお、建物関係については昨年に続いて小早川1級建築士が担当した。

報告書によれば、舞阪町クリーンセンターは、風致地区内に建設することを余儀なくされたため、高さ制限その他多くの制約があったにも拘らず、非常によくまとめられ、公害や環境破壊に対しても行き届いた配慮がされているようである。また、工事に対する町職員特に若手職員の取り組み方は極めて熱心で、例えば中間調査で指摘された事項は完成時には殆ど改善され、対応内容が報告書・写真等で具体的に報告されたとのことである。

瀧口定一元会長米寿祝賀会 兼 東部新年会

名誉会員・元会長瀧口定一顧問は去る1月16日めでたく満88才の誕生日を迎えられた。

東部地区会員は例年1月下旬に新年の懇親会を催しているが、今年は特に瀧口顧問の米



寿祝賀会として、1月21日沼津駅前江戸沢に東部会員の過半数が参集し盛大に行われた。

席上、会員の祝意を表するため細やかなプレゼントが贈呈されたが、これに対し瀧口顧問は出席者全員ひとり

ひとりに記念品を手渡され、一同いたく恐縮した次第である。

瀧口顧問は1906年即ち日本海軍の翌年にお生まれになり、以来戦前戦中戦後を通して各地でご活躍になり、今日なお現役であるという驚異的存在である。



瀧口顧問は挨拶の中で「無病息災に長寿を保ち、且つ常にエネルギーであるための秘訣は、年齢の区切り目毎に新たな目標を設定し、それに向かって生きて行くことではないかと思う。88才になって設定した新たな目標は、満百才になってタレントになることである。」と発言され、大喝采を受けられた。キンさん・ギンさんに代ってブラウン管に登場されるまでは、今のご専門の分野で益々ご活躍されるようお願いしてやまない。

「あの日の情景」瀧口先生との出会の頃 会員 稲葉弘之

春になると思い出すことがひとつある。その日、1987年4月3日、午後2時頃だったと記憶している。甲子園の高校野球、準決勝の中継をぼんやりと眺めていた。場所は新潟空港、国際線のロビーで。

手提げ型の大型ザックひとつ、ショルダー

バッグひとつ、そして片道航空券を持って。行先はハバロフスク。

つい3日前会社を辞めて失業者になったばかりであった。この時点では、東日という会社の会長さんという人（瀧口先生のこと）に二度程会い、帰国後（いつになるかわからないが）採用してくれるだろうという感触を得ただけである。丁度日本経済は円高不況の末期にあたり、実質失業率が3%を越えたとの報道が耳に痛かったのを憶えている。

はっきりした理由は何もなしに勝手に会社を辞め、こそこそ国外に逃げ出すような、そんな気持ちにとらわれていたように思う。同じことを今の〇しがやっても、ただひたすら明るく、成田空港の南ウイングあたりで手放しで喜んでいる図が容易に想像できる。ところが私はおじさんなので、ただただ深刻に考え込んでいた。当面の行先はソ連（当時）である。指名手配された日本赤軍みたいだと思った。

ハバロフスクからの機体が静かにエプロンにうづくまる。バック旅行の団がホッとした表情でゲートから出て来る。折り返し自分がこれに乗るのだ。隣に駐機しているソウル行きが、明るく華やかに見える。

120人乗りのツボレフに30~40人の乗客、大半はグループ旅行者である。ボツンとひとり隅の方に席を占める。話相手はいない。離陸し、ふと外を見ると、曇った空の下に信濃川がにぶく輝いていた。

2時間後、荒涼たる原野の中、凍てついたハバロフスク空港に到着。賑やかなグループに無言で別れを告げ、一人市内へ。

このあとモスクワ、レニングラード（当時）、北欧を経て、パリ、ロンドンまで「国外逃亡」の旅は続く。旅行の全体から言えば、滞在日数の多いこともあって、印象は後半の西欧諸国に偏っているのだが、なぜかこの日、4月3日の新潟空港の待ち時間のことが頭から離れない。

勤めていた会社を辞めるといのは、人生の中でそう何度もあるシチュエーションではない。そのときの沈んだ気持ちが記憶をつなぎとめているのだろう。

あれからやがて7年が経ち、新たな職場にすっかり定着した今日、カレンダーを眺めてこんなことを思い出している。こんな日が人生にいくつもあっては困るが、良い意味での忘れられない「あの日の情景」をいくつか持てるような、そんな人生が送ればいいなあと考えている。

会員消息

(敬称略)

名取専務理事退院

既報の通り名取専務理事は、昨年来修善寺日赤病院で病氣療養中であったが、2月26日無事退院の運びとなった。なお暫くは自宅で静養されるものの次回総会には出席される予定である。

入会

^{いわた} ^{れいいちろう}
岩井田 黎一郎

(応用理学部門)

水資源開発

1925年1月2日生

自宅 〒424-02 清水市
興津本町307-10

TEL 0543-69-2550

勤務先 日将(株)取締役
静岡市古庄629-1

TEL 054-261-4588

略歴 静岡県農地部、総理府北海道開発局農業水産部、愛知用水公団工務部、農林省東海農政局計画部兼建設部地質官内外エンジニアリング(株)

業績 静岡県内開拓地水源調査等、北海道内国営地区ダム地質調査、愛知用水幹線水路関係、スラバヤ市水道水源調査等

資格等 測量士、地すべり防止工事士

最終学歴 北海道大学理学部地質鉱物学科卒



^{おおくさ} ^{あきら}
大竹 昭

(機械部門)

機械設備

1941年11月15日生

自宅 〒411 三島市富
士見台42-3

TEL 0559-86-0473

勤務先 (株)リコー
御殿場市駒門1-10

TEL 0550-87-3210

略歴 67~70年 フォスター電機(株)勤務

70年~ (株)リコー 生産技術部門勤務

業績 自動化設備(自動機・組立ライン・物流設備・梱包設備等)の企画・開発・設計

(株)リコー御殿場工場建設に伴う自動化設備・ラインシステムの企画・開発・設計

資格等 衛生工学衛生管理者

最終学歴 工学院大学機械工学科67年卒業



^{かどい} ^{かずのり}
角入 一典

(建設部門)

都市及び地方計画

1953年12月31日生

自宅 〒418 富士宮市
源道寺町595

TEL 0544-27-4618

勤務先 富士宮市役所
第二東名推進室室査
富士宮市弓沢町50

TEL 0544-22-1111

略歴 77年~富士宮市役所勤務、土木課・区画整理課・水道部等

91年~現職

業績 組合区画整理事業、富士宮市上水道第一次整備事業、新水源開発事業、富士宮市都市基本構想策定その他

資格等 1級土木施工管理技士、1級造園管理技士、2級建築士

最終学歴 法政大学工学部土木工学科76年卒



^{かとう} ^{のぼる}
加藤 昇

(建設部門技術士補)

1958年7月14日生

自宅 〒410-11 裾野市
久根127-93

TEL 0559-92-5253

勤務先 (株)東日設計部
沼津市大岡2240-3

TEL 0559-24-5530

略歴 81年~現職

資格等 測量士

最終学歴 関東学院大学工学部土木工学科
81年卒



【編集後記】

会報第1号は1975年3月28日に発行されました。当時の会報担当理事は吉永現顧問で、編集後記は吉永「編集長」の名前と写真入りで載っています。その中に「だんだん良くなるから、下手なものでもとにかく出すことになった。」と書かれています。

以来19年、森稔夫名編集長はじめ多くの方々のご努力により、今日まで続けられて来ました。私も初めてお手伝いをさせて頂いてから13年になり、次に番が回って来る時は70才近くになる勘定ですから、もうお前やれとも言われないでしょう。この号と第1号を較べて見た時「だんだん良くなる」という初代編集長のご期待を無残に打ち砕いてしまった責任を痛感致します。(編集長 本領泰弘)